

P1-005

発達障がい児に対するソーシャルスキル
トレーニングとペアレントトレーニング
の効果の検討

富尾 則子¹、淵上 達夫¹、笹川 彩¹、佐藤 菜穂¹、
恵良 美津子¹、高橋 桃子¹、桃木 恵美子¹、
福田 あゆみ¹、小平 隆太郎¹、藤田 之彦²、
高橋 昌里¹

¹日本大学 医学部 小児科学系小児科学分野、

²日本大学 医学部 医学教育企画・推進室

【目的】

我々は、発達障がいおよびその疑いの未就学児に対し、少人数グループの机上課題、粗大運動、音楽療法を組み合わせたソーシャルスキルトレーニング（以下SST）を、その保護者に対してはペアレントトレーニング（以下PT）を行っている。その効果を検討するため本研究を行った。

【方法】

SSTに参加した51名中、2歳6か月以上の発達障がい児とその保護者で育児ストレス尺度（以下PSI）を2回以上実施した15例に対してトレーニング開始前後の知能指数（IQ）とPSIについて比較検討した。

【結果】

SST前後で田中ビネー検査によるIQ測定を行った児は、8名（平均年齢3歳6か月、男:女=7:1）であり、そのIQは、トレーニング前は 86.2 ± 14.7 （平均値±標準偏差）であったが、後では 95.1 ± 13.1 と、トレーニング後のIQは前に比べ有意に上昇（ $p=0.012$ ）していた。2症例について、田中ビネー式検査の下位項目のうち制限時間のある項目、記憶したことを表出する項目の経過を検討すると、開始前後で生活年齢未満の級で通過した項目は40%から87.5%と25%から83.3%と改善していた。また、保護者15名のPSIについては、ペアレントトレーニングに参加した群は8例（平均年齢2歳ヶ月～4歳10ヶ月、男:女=7:1）で、参加しなかった群は7例（平均年齢2歳11か月～5歳9か月、男:女=6:1）で、トレーニング前後のPSIを検討すると、PT参加群におけるPSIの子どもの側面のパーセンタイル値の平均は、トレーニング前の62.9%から、後では44.4%と有意に低下していた（ $p=0.034$ ）。しかし非PT参加群ではPSI値の変化はみられなかった。

【考察】

IQ値の改善は、発達障がい児に対する幼児期の適切なSSTにより児の本来の知能を評価できるようになったのではないかと考えられた。またPSI値の低下は、PTは親のストレスを減少させる効果があると考えられた。[結語]小児の発がい障害においては、心理士、音楽療法士、医師が連携を図り、児に対するSST、親に対するPTを組み合わせることで、より効果的な支援ができると考えられた。

P1-006

子どもの学習に対して保護者はどのよう
に環境やかかわり方を調整しているのか
—数概念・計算学習をめぐる脳性まひ児
と典型発達児の2事例から—

真鍋 健

千葉大学 教育学部

【目的】

乳幼児期の生活を通じた学び、塾や習い事での学習、療育機関等での学習など、子どもは学校教育以外にも多様な学びの場を経験している。では、そうした学びの場で直接的にも間接的にも子どものすぐ傍にいる保護者は、それぞれの学びの場や子どもの姿をどう理解し、学びに向けた環境やかかわり方などを調整するのであろうか。本研究では、以下に述べる2名の事例に関して、数概念・計算学習に限定し、保護者が生活でどのような調整を行い、学習を支えようとしていたのかを、俯瞰的・生態学的な視点から検討する。

【方法】

対象は脳性まひ児（通常学級3年生・知的障害あり・視知覚困難あり）と典型発達児（保育所3歳児クラス・継次処理有意）の2名である。筆者が行った個別指導内での記録、生活記録（日誌等）、また半構造化面接によるインタビューから得られたデータから、保護者の環境調整とその意図や背景に関するものを抽出し、時系列に沿ってまとめた。なおいずれの事例も保護者への研究・報告趣旨を説明し同意を得た。

【結果】

(1) 脳性まひ児（CA：4歳～9歳）幼児期のころは民間の学習塾と療育機関に通っていたが、「楽しかったと思います」と不安もなく、特段調整を行うことはなかった。しかし小学校に入学して以降、本人のレベルと授業内容にギャップが始めるとともに、通常学級での宿題をこなせなくなり時間的余裕もなく、楽しみであった学習塾を辞める決断を行う。そうした経験を2年経て、3年生以降は体力、認知特性、興味を勘案して、宿題の量や療育機関で提示されたタブレット学習端末の導入タイミングなどを計るようになった。

(2) 典型発達児（CA：1歳半～4歳）2歳当初、お風呂場での数唱の経験やリモコン、エレベーターの数字読み（押し）から、数との出会いが始まる。一方で、その後の生活内での数との関わりは、季節の変化や成長に伴う興味の遷り変りに影響を受け多様に变化した。同じ場でも異なる（数の）遊びや活動を行い始める児に対して、保護者は「去年はここで〇〇をしていたから」と一旦は同じ活動を試みるも、結局は新しい子どもの数との関わりを盛り上げるべく妥協し、「遊具の数や配置の調整」などを行っていた。

【考察】

各機関や場で子どもが得る経験に対して、保護者自身が様々な葛藤を経ながら、調整を行っていることが明らかになった。今後、他の事例も含めて、調整機能の内容を更に明らかにしたい。